



「多久から発信！SDGs③」

「子どもたちを見守る」

多久市では、平成28年4月から「コミュニティ・スクール」を運用し、地域の皆さんや保護者に学校経営に参画いただくことで、地域と学校が連携し、地域に開かれた学校をめざしています。「地域とともにある学校」として、今後も充実した活動をしていきたいと思っています。

地域の皆さんにご支援いただいている取組の一つに「登下校の見守り・指導」があります。その役割を担っていただいている存在として「交通指導員」の皆さんがいらつしやいます。現在、18名の交通指導員の皆さんが、元気なあいさつを子どもたちに届けながら、登下校の安全を見守ってくださいています。

登下校時を含めた交通指導をリードする役割は、子どもたちも担っています。各校の6年生(4名ずつ、計12名)が「児童交通指導員」として県警や交通安全協会、交通指導員の皆さんと連携し、交通に関する意識の向上を図るために活動しています。

スクールバスの停留所となる場所では、地域や保護者の方が子どもたちの乗降を見守ってくださいている箇所もあります。あいさつ運動として、民生委員や主任児童委員の皆さんが校門近くで活動にご協力をいただくことも。登下校だけでも、これだけ多くの皆さんにご協力をいただいているからこそ、市内の義務教育学校に通う子どもたちが、毎日を元気に過ごすことができます。

子どもたちの安全・安心につながる活動が、市民の皆さんによって進められています。今後とも協力ください。

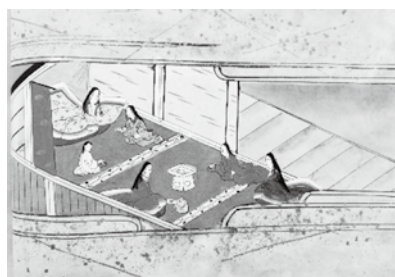


連載

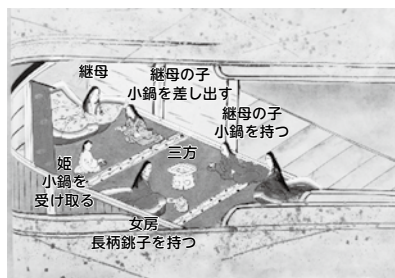
紫式部・和泉式部・小式部の物語 挿絵(2)

多久家資料『小しきふ(小式部)』を編集

『小式部(上)』挿絵2 紫式部の子の話(その1)



土産の小鍋が欲しいと娘が歌を詠んだことに、継母も感動し、継母の子が持つ小鍋を娘に与えています。



紫式部が産んだ子は六歳になりました。紫式部は子に、「歌の道をよく読み習いなさい」「伊勢・小町が詠んだ歌を見て好めば上達しますよ」と教えます。娘は「母や母 粉飲めば 歌の詠まるるか」と詠みます。母親が言った「好め」を「粉飲め」と勘違いしたのですが、そのあけなさに皆笑顔になった、と物語は記しています。

ところで、紫式部は「宿願の事があるので石山寺の観音に参ります。継母に嫌われないようにしなさい」と言いつて、石山寺に籠りました。その間の出来事です。

伊勢参りをした人が、お土産に立派な焼き物の小鍋二つを、継母の子二人にあげました。娘にはなかつたので、娘は欲しくて泣いていました。その折、竹林に鶯が鳴くのを聞き「鶯のなごさは鳴くぞちや欲しい小鍋や欲しい 母や恋しき」(鶯は どうしてそれほど鳴くのか 乳が欲しいのか 小鍋が欲しいのか それとも母が恋しいのか)と詠みました。娘の歌に心を動かされた継母は可哀想に思い、我が子に与えた二つをもらい、娘に与えました。【挿絵2】

紫式部は石山寺で、源氏物語六十帖を大般若経の裏に書きました。そして、絵師を呼んで自分の姿を絵に描かせ、庵室を造り、この絵を本尊として、菩提を求めてくださいと言ひ、所領を石山寺に寄進して戻りました。この後、娘には試験が待ち受けています。

※原本の挿絵は色絵になっています。郷土資料館に写真を掲示していますので、お立ち寄りの際にご覧ください。

多久市郷土資料館長 藤井伸幸

市民文芸

◆林立するビルのはさまの陽だまりに
若き工夫の横笛を吹く
川浪 信子

◆朝が来て生きている事感謝する
夫の介護を楽しみながら
梶原恵美子

◆「愛してる」それだけなのに永遠に
言えない言葉時を越えたい
野崎 隆幸

◆麦の香の母屋に満ちて初夏の風
家族総出の麦秋なつかし
浦野 嘉恵

◆孔子廟守り来し村人の三百年
直系七十九代の感謝は深き
尾形 節子

◆豌豆の花のまはりが暮れのこり
片腕の土偶の頬やさみだるる
武富 律子

◆初夏の風生きて生きてと背を叩く
本村 則子

◆学園の生徒九人風光る
富樫 明美

◆石楠花に日陰の匂ひ ありにけり
大石ひろ女

◆魚の目に見つめられては捌けない
大谷 和

◆いりこでもお頭つさき いちちよまえ
小副川ヨシエ

◆田の水が光り輝き 田植え待つ
田代えみ子

◆コマシヤル初回限定 ややこしい
井上 稔子

◆恋はいつも火となり水にそして風
田代まつこ